

異世界に飛ばされた
Where is Ossen going in
another world?
おっさんは
何処へ行く? 4

シ・ガレット
ci garette



目次

第③章

新生活……………

163

第②章

新たな計画……………

067

第①章

王都パミルでの出会い……………

007



ブラン

うさぎ しんじゆ
兎の神獣。
ちょっぴり甘えん坊。

ヴァイス

瀕死のところをタクマに
助けられた子狼。
タクマのことが大好き。

ゲール

とら
虎の聖獣。
控えてめでたしい。

ナビ

スキル「鑑定」の
ナビゲーション
システムが
実体化した姿。

アルテ

湖畔に棲む水の精霊。
人間が大好き。

タクマ

異世界に飛ばされて
きたおっさん。
趣味を楽しみながら
異世界を旅する。

レウゴン

へび
蛇の神獣。
小さいのにしっかり者。

ネーロ

狼の神使。
お調子者の
ムードメーカー。

アフダル

かみ
鷹の神使。
冷静で賢い。

ジュード

ドラゴンの子供。
好奇心旺盛で
いたずらっ子。

主な登場人物



第①章

王都パミルでの出会い



1 お忍び

日本から異世界ヴェルドミールへ飛ばされてきたおっさん、タクマ・サトウ。守護獣である狼のヴァイス、虎のゲール、猿のネーロ、鷹のアフダル、そして新たに仲間になったドラゴンのジュードとともに旅を続ける彼は、各地で孤児を見つけては、鉱山都市トーランの孤児院へ送り届けていた。

積極的に孤児を保護していたということもあって、孤児院はすぐに満杯になってしまったのだが、トーランの領主コラル・イスル侯爵の口利きによって、タクマは大きな屋敷を手に入れた。

その屋敷にタクマは、多くの人々を保護し、孤児はもちろん悪い貴族に捕らえられていた人々、さらにはその家族さえ住まわせた。

そうしてタクマは、生活の基盤を確かなものにしていくのだった……またもや厄介事が噴出する。コラルに、自分が異世界から来た転移者であると打ち明けたのをきっかけに、王と謁見することになってしまったのだ。

どうやら過去において、タクマ以外にも別の世界から来た者がいたらしい。

しかし、転移者は強大な力を持つゆえに、力の使い方を誤って国を滅亡の危機に陥れてしまっ

たという。そのような危機を避けるため、王はタクマと繋がりを作っておきたいようだった。

新たな面倒事の匂いを感じ取ったものの、タクマは世話になっているコラルの顔を立てるために王都行きを決心した。

ところが、タクマの不安は的中する。

王都までの道中で暗殺者に狙われ、到着してからは使いの者に絡まれたりしたのだ。

王との謁見自体は滞りなく進み、自分に有利すぎる契約を交わすことができたものの、タクマは拭い去ることのできない不信感を募らせるのだった。



急な夜中の謁見から数日が過ぎ、タクマたちは王都での生活を満喫していた。

同行してもらったファリンは息子のことが気がかりだったようなので、空間跳躍で帰してあげた。本当は一緒に謁見してもらおう予定だったのだが、コラルに確認してみると、契約書に異論がなければタクマだけでいいということなので帰宅させたのだ。

パミル王都にあるコラル・イスルの別宅の応接室で、タクマは難しい顔をしている。隣に座るコラルはもっと複雑な顔をしていた。

タクマはその表情のまま、コラルに尋ねる。

「コラル様。この国の王は自由に外を出歩くことができるのですか？」

「できるわけないだろう。城から出ることはほとんどないはずなのだ。だからこそ困っている」
タクマとコラルは、二人の対面に座る人物に目を向けた。

「どうしたのだ？ 二人とも難しい顔をして」

そう言っつて首をかしげるのは、王である。

「国王様。なぜここにいらつしやるのですか？ 仕事は山積みのはずですが……」

「仕事はしつかりと済ませてあるぞ？ おかげで昨日は徹夜になってしまったがな」

どうやら国王はここに来るために、仕事を前倒ししてきたようだった。

護衛で付いてきた近衛（こゑ）の騎士は困った顔をして様子を窺（うかが）っている。タクマは王の相手をコラルに任せてその場を離れ、近衛に尋ねた。

「王が外出していることを城の者は知っているのか？ どう考えても許されるとは思えんのだが」

「ええ……タクマ様の予想通り、大反対をされてしまいましたね。ですが、行かせてくれないなら抜け出してでも行くとおっしゃりまして……」

近衛はそう言うため息をついた。

「なるほど。苦労したみたいだな。まあ、この家にいる間は休憩でもしててくれ。ここは俺の結界が張つてあるから安全だしな。帰りは危険があると困るから送つていこう」

タクマは使用人を呼びつけると、近衛たちにお茶や食べ物を出すように頼んだ。

近衛とタクマが話をしている間、王はコラルからしつかりと説教(?)されていた。それが終わるような頃合いを見て、タクマは応接室のソファーへ戻る。

コラルが王に、諭すように告げる。

「今回はすでに来てしまっているので仕方ありませんが、次からは自分の立場を理解して行動してください」

「はい……」

大の大人がガツクリと肩を落としている。タクマは思わず苦笑したものの、助け舟（たすけふね）を出してあげることにした。

「コラル様。もうこの辺でやめておきましょう。もういらしてしまつたのですから」

「そうだな……ところで国王様は、どんなご用でいらしたのですか？」

コラルが聞くと、王は急に元気になり話し始めた。

「うむ！ ここに来ることが目的でその後は考えていない！ ……つていうのは冗談で。タクマ殿とじっくりと話したかったのだ」

王はなぜか上機嫌である。

「俺は……いや私は、呼んでいただければ伺いましたよ」

「それでは落ち着いて話せないではないか。ゆっくり話したいので、こちらから出向くことにしたのだ」

そう言うと、王はどんどん話していく。
まずは、アコール元侯爵の顛末について。

アコールは王都に向かうタクマに暗殺者を差し向けた黒幕で、すでに死罪とされたらしい。ちなみに、なぜアコールがタクマを狙ったのかというと、タクマがパミル王国に力を貸すことを恐れたため。秘密裏に魔法国マジルに通じていた彼は、暗殺完遂後に亡命するつもりだったようだ。次に話したのは、タクマ自身について。

貴族たちに秘密厳守で、タクマが転移者であることを伝えたらしい。そうすることで彼の危険性を知らしめ、タクマと敵対することを国として禁止したという。この命令を無視した場合は、厳罰に処せられるようだ。

最後に、タクマがお土産として渡した酒について。

やはり地球の酒は最高だったそうだ。今まで飲んでいた酒が飲めなくなったと王は笑っていた。ひと通り話を聞いたタクマは率直な感想を伝えた。

「最後の酒の件はともかく、他の話は次の謁見のときでよかったのでは？」

「確かにそうなんだが、君も早く知りたかっただろう？ 謁見は肩が凝るしな」

そう言って王は、肩をすくめる。それを見てタクマはやれやれとため息をつきつつも、わざわざ話してくれたことに感謝した。

その後は時間の許す限り、くだらない話をして過ごした。途中昼食を挟んでも、話は尽きな

かった。

外を見るとすっかり暗くなっている。近衛たちがそろそろと促すので、タクマは王を城まで送ることにした。

タクマが転移者であるのを王に報告した際に、彼が空間跳躍を使えることは伝え済みらしい。そんなわけで、遠慮なく使うことができる。

転移先は、無人だという謁見の間。

王が乗ってきた馬車は後日コラルに返却してもらうことにして、タクマは城へ跳ぶのであった。

2 息抜き

「アウン！（父ちゃん、楽しいねー！）」

楽しそうにタクマに吠えているのは、狼のヴァイスだ。

「ミアー！（お父さん、こっちー！）」

虎のゲールは甘えた声を出している。

「キキ？（ご主人、泳いでいい？）」

猿のネーロは元氣いっぱいである。

「キユイ！（木がいつばいで元気になるー！）」
子童のジュードは何にでも興味津々だ。

ヴァイスたちは、久しぶりに訪れた広い森で元気に走り回って遊んでいた。ちなみに鷹のアフダルは、タクマの肩の上で彼らがはしゃぐのを見ている。

アフダルが心配そうにタクマに尋ねる。

「ピユイー？（良かったのですか？ 誰にも言わずに来てしまっただ）」

「ん？ 謁見まで待たないといけないのは分かっているが、町の外に出では駄目と言われてないしな。それに何かあれば、コラル様が遠話で呼んでくれるだろ？」

タクマはコーヒーを飲みながら、ヴァイスたちが元気に遊んでいるのを微笑ましく見ていた。

なぜこの森に来たのかというと——王都に飽きてしまったからだ。

それに、ヴァイスたちも慣れない環境でストレスが溜まっているようだったので、コラルが寝ているうちに王都を抜け出したというわけである。

今タクマたちがいるのは、王都から50 kmほど離れた人気のない河原だった。



さかのぼること数時間前。

日は出ておらず、辺りはまだ真つ暗だ。目が覚めたタクマは着替えを済ませ、ソファア一人でコーヒーを飲んでいた。

すぐにヴァイスたちも起きてくる。

「アウン……（父ちゃん、おはよー……）」

「ミアー……（おはよう、お父さん……）」

「ピユイ（おはようございます）」

「キキ……（ご主人、おはよー……）」

「キユイ……（タクマ兄ちゃんおはよ……）」

いつもはすぐぐ寝起きが良い子たちだというのに、ここ数日は元気がない。理由は明らかで、王都で息苦しい思いをしているのだ。

そんな彼らを見て、タクマは決心する。

「みんな元気がないな……よし！ 今日王都を出て、気晴らしに行こう！」

タクマがそう宣言すると、皆驚いた顔をした。

「アウン!?（良いの!?)」

「ミアー！（外行きたかったのー!）」

「ピユイ？（良いのですか?）」

「キキ！（森に行きたいなー!）」

「キユイ！（僕も外行きたいー！）」
こうしてタクマは、ヴァイスたちのために王都を離れると決めた。
紙とペンを取り出すと、コラル宛に書き置きをしておく。それから準備を整え、家に強力な結界の魔法を施して家を出た。誰かに目撃されると面倒だったので、しっかりとおんみつ隠密の魔法を自分たちに使う。
そうして誰にも気づかれることなく、タクマたちは無事に王都を出たのだった。



タクマたちはのんびりした時間を過ごしている。
久々に制限なく動けるということもあって、ヴァイスたちは自然を満喫していた。
川に入って水浴びをしたり、木登りをしてみたり、森の中で走り回って競争したり、王都では味わえない自然そのものを楽しんでいる。

そんなヴァイスたちの生き生きした姿を見て、タクマはにこやかな笑みを浮かべていた。
タクマの周囲を飛び回りながら、ナビゲーションシステムのナビが話しかけてくる。

「マスター、やはりヴァイスたちは自然の中にいるのが一番生き生きしていますね」

「ああ、このところ家にこもりきりだったから尚更だろうな。もっと早く連れてきてやるんだった

よ。ナビも外に出られたほうが楽だろう？」

「どちらかと言えばそうですが……でも、マスターの中も快適ですよ。外の様子はマスターの目を通して見えますし」

ナビも開放的な気分になっていようだ。いつもより声が弾んでいる。

「マスターも自然の中のほうが好きみたいですね。表情が柔らかいです」

「そうか？ まあ、静かなところは好きだからなあ。ゆったりと過ごせるのは幸せなことだろ？」

「そうですね。でも私はマスターといらればそれだけで幸せなんです。それこそ、どこにいても大丈夫なんですよ。そうではあるんですが……やっぱり、自然は落ち着きますね」

「だよな。本当は町に住むよりも、こういった自然の多いところで暮らしたいよな。だが、子供たちのことを考えてみるといろいろ無理があるか」

今のトールンでの生活に不満はない。だが、町から離れたところで生活したいという思いもある。タクマは、人ごみの中より自然が好きなのだ。

しかし、孤児たちの教育や安全を考えた場合、トールン以上の環境を用意するのは不可能に思われた。
「マスター、空間跳躍の魔道具を設置するというのはいかがでしょう？ そうすれば町から離れた

ところにすぐに行けるようになりますし、それでいて今と変わらない生活も維持できると思います。新たに用意した敷地には、マスターが結界を張れば安全ですし」

ナビの提案を、タクマは思案する。

「魔道具か、その手があったな。魔道具なら異世界商店に売ってるかもしれんし、なければ自分で作ってみるのもありだな。ナイスアイデアだ」

タクマは前向きに考えてみることにした。

「みんな！ ちょっと来てくれるか？」

さっそくヴァイスたちを集める。ナビと話した内容を伝えると、全員が目を輝かせて賛成してくれた。

ヴァイスたちは町にいるのも嫌いではないのだが、どうしても自然が恋しくなってしまうらしい。引き取った子供たちや一緒に住んでいる者たちが賛成してくれるなら、ぜひ自然の中で暮らしたいそうだ。

「そうか。じゃあ、トーランに帰ったら、みんなで会議をしようか？」

((賛成ー！))

それからタクマたちは、そのまま泊まることにして、休日を思う存分楽しんだのだった。

3 書き置き

タクマたちが王都を出て森へ到着した頃、コラルの屋敷ではちょっとした騒ぎが起きていた。

食事の準備を終えた使用人が、タクマたちを呼ぼうと部屋を訪れたのだが、返事がなかったのだ。いつもは呼びかけたら必ずドアを開けてくれたのに、今日は反応がまったくない。心配になった使用人が静かにドアを開ける――

部屋は、もぬけの殻かぶらだった。

タクマたちの代わりに、テーブルの上には一通の封筒が置かれていた。コラル宛てだったので、使用人はその封筒を持って執務室へ急いだ。

「失礼します。緊急です」

ノックをして入室した使用人がそう言うと、コラルが対応する。

「緊急とは穏やかではないな。どうしたのだ」

「朝食の準備が終わったのでタクマ様を呼びに行ったのですが……部屋はもぬけの殻でした。そして、テーブルにこれが……」

使用人から封筒を受け取ったコラルは、さっそく開封してみた。

コラル様

王都に飽きたので、ちょっと遊びに行ってきます。

ヴァイスたちも慣れない場所でストレスが溜まっているみたいです。帰りの時間は分かりません。

もしかしたら、一泊してくるかもしれません。

ですが、心配は無用です。

緊急時には遠話を使ってもええれば戻るようにします。

それと、これは私のわがままなのですが、もし謁見が今日か明日になってしまつようであれば、ずらしてくださいませんか？ 謁見も大事だと思っているものの、私にとってはヴァイスたちのほうが大事なのです。大変申し訳ないのですが、よろしく願います。

そうそう、邸宅にはしっかりと結界を施してありますので安心してください。

結界が張ってあっても、家の者は出入りできるようにもしてあります。外を出歩く場合は、必ず護衛をつけてくださいね。

タクマ・サトウ

読み終えたコラルは頭を抱えてしまった。

「タクマ殿……行くのは止めんから、事前に知らせてくれ。ともかく仕方ない。城に行つて謁見の日程調整を頼んでこなければ……」

コラルの穏やかでない様子を見た使用人が尋ねる。

「あ、あの。タクマ様たちは……」

「ああ、タクマ殿たちは気晴らしに出たそうさ。今日は帰ってくるか分からんらしい。食事はいら

んのだろうな」

「分かりました。他の者にも伝えておきます」

それからすぐにコラルは、日程調整のために王城へ行った。

王が置いていった馬車を、ついでに返却しておく。

城内へ入つたコラルは、さっそく係りの者を見つけたので、話しかける。

「謁見の日取りはどうなっている？」

「は！ コラル様とタクマ・サトウ殿の謁見は……明後日の朝からになっております」

どうやら日程を変更する必要はなかったようだ。

続いてコラルは、王の執務室に向かった。ちなみにコラルは、先日の説教（？）事件以来、王の執務室へ自由に出入りできるようになっていた。

執務室のドアをノックして声をかける。

「おはようございます」

「おお、コラルではないか。今日はどうしたのだ？」

コラルは、タクマが置き手紙を残してどこかに行つてしまった旨を伝えた。

「はっはっは！ タクマ殿らしいな。実に自由だ。やはりあの従魔たちと同様、タクマ殿も静かなところが好きなんだろうな」

「おそらくそうですね。トーランにいるときも定期的に外出しているようでしたし」

「羨ましいことだ。自由なタクマ殿に対して我は、お前のところに行っただけで宰相から長い時間説教を受けた。それにお前からもな。たまに王という身分を恨めしく思うわ」

「人というのは他人の物ほど羨ましくなるものです」

そう言ってコラルは、遠回しに軽率な行動を諫めた。

「これからは自重してくださいね。近衛にも迷惑がかりますから」

「うむ。気をつけよう。ところで、あの件はどうなっている？」

急に真面目モードに変わった王が尋ねてくる。あの件というのは、タクマとの不可侵契約のことである。

「タクマ殿との契約に反対している者は、あの夜に謁見の間にいた数名です。彼らにも何か理由があるんでしょう」

続けてコラルは、声を潜めて言う。

「それで、少しばかり調べてみたところ……どうやら、不正をしている可能性がありました。さらに調査してみると、私兵の給与を水増しして、補助金を横領しているようで……」

王は厳しい顔をして告げる。

「そうか。では、それを口実に閑職へ異動だな。それと監視も必要だ」

「すでに手は打ってあります……あとは国王様の署名だけです」

そう言うコラルは、懐から書類を取り出した。

王は内容を確認するとゆっくり頷く。書類には、反対している者たちすべてが政治とかけ離れた部署へ異動する手はずが整えられていた。

「仕事が速いな。では、この内容で内示を発行しよう」

王は受け取った書類を自分の机にある未処理の束の上に置く。

それから王とコラルは酒の話始めた。

「しかし、タクマ殿がくれた酒は絶品だったな。タクマ殿の故郷では、いつもあんな酒を飲めるのだろうか？」

「どうでしょう？ あれほどの高級酒を飲める者は限られるのではないのでしょうか？」

タクマが二人に贈呈したお酒は二種類あったが、どちらもそれほど高級ではなかった。当たり前だが、そんなことは二人の知るところではない。

王はタクマにももらったお酒のことを思いながら呟く。

「あれほどの酒が造れたら、どれほど国が潤うのだろうか。タクマ殿は造り方を知っているのだろうか？」

「あの酒を造りたいのですか？ 膨大なコストがかかるのではないのでしょうか？」

王は酒を楽しむだけでなく、それを事業として行うことを考えていた。ただし、王もコラルもその造り方や予算については、想像すらできない。

「多少金がかかるのは仕方ないだろう。もしタクマ殿が造り方を知っていれば、教えてくれとお願い

いしてみようか」

王はそう言うと、タクマに依頼するための条件を、コラルとあれこれ論じながら決めていく。その議論が白熱してしまったのもあって、コラルが家に戻れたのは辺りがすっかり暗くなってからだった。

翌日、いつ戻ってきたのか、応接室のソファアではタクマたちが寛いでいた。そんなタクマに、コラルが皮肉交じりに話しかける。

「書き置きだけ残して外へ行くほど王都は住みづらいか？」

タクマはソファアに座ったまま、率直に言った。

「正直に言えば住みづらいですね。人も多いですし、何よりヴァイスたちが暮らしにくそうなので俺も王都には長く住みたいとは思いません」

「そうか。ではトーランはどうだ？ あそこは人口も王都ほど多くないし、何より好奇の目がないだろう？」

「王都もトーランもあまり変わりません。トーランは自分たちの家族が住んでいるから、王都よりはまだ良いというだけかもしれません。本当は、ヴァイスたちが自由にできる場所に住みたいんです」

タクマはトーランの領主であるコラルに失礼とは思いますが、やはり自分の正直な気持ちを伝

えた。

「つまりは、町の外に家を持ちたいということかな。確かにヴァイスたちは自由にできるだろうが、他の者はどうなる？」

タクマの屋敷には孤児を含め多くの人間が住んでいる。町を離れることは、彼らに多くの不便を強いることになるのだ。コラルはそのことを心配していた。

「その辺も考えてあります。まあ、帰ってアークスと相談しなければなりません」

タクマがそれ以上は話したくないようだったので、コラルは話題を変える。

「そうか、皆が無理のないようにできると良いな。では、明日のことなんだが……」

コラルは謁見について説明していった。

初回の謁見ではタクマに敵意を向ける者たちがいたが、そうした者たちは一掃されたらしい。そのことを聞いて、タクマは胸を撫で下ろした。

「そういう輩がいなくなったのは、良かったです」

「……謁見で国王に礼をしないのもどうかと思うんだがな。今回もする気はないのだろう」

コラルは、初回の謁見の際にタクマが王に礼をしなかったことを指摘したが、タクマは相変わらずだった。

「そうですね、その気はありません。契約書にも対等だとありましたから」

コラルもこれ以上言うつもりはなかった。

その後、細かい打ち合わせを終わらせたタクマは、ソファで寛いでいたヴァイスたちを起こし、彼らとともに部屋へ戻っていった。

4 再び謁見

翌朝。早めに起きたタクマたちは庭で朝食を済ませた。

今回の謁見はタクマ一人で行くので、それまで、ヴァイスたちとスキンシップを取っておくことにしたのだ。

そうして戯れていると、その様子を観察していたコラルが不思議そうに尋ねる。

「タクマ殿、君たちは本当に仲が良いんだな」

「おはようございます。早いですね」

「もうすぐ出発の時間なんだが」

ヴァイスたちに構っていて、あつという間に時間が過ぎていたらしい。

少しでも気分が楽になるようにヴァイスたちは自然の多い庭で待機させ、タクマはさつそく城へ向かった。

馬車の中でタクマは、コラルに昨日話した町の外に住む計画を詳しく説明した。

「うーむ。空間跳躍の魔道具を用いて、トーランの屋敷と別の場所を繋ぐというのか……その方法なら行き来は問題ないだろう。だが、魔道具の警護が必要になるのではないか？ それに使用制限だったか？ 誰でも利用できてしまつては、タクマ殿が町の外に住む意味がなくなる」

「そうですね。警護のほうは防衛用の魔道具を活用することもできるでしょうが、使用制限のほうは考えないといけないでしょうね」

そんなことを話していると、あつという間に城へ到着した。

この件については一旦保留となり、コラルは王と打ち合わせがあるので別行動となった。

タクマは別室に案内され、お茶を飲んで待つ。

「タクマ様、準備ができましたので、謁見の間へどうぞ」

係りの者が呼びに来た。

やたら豪華な扉の前で待っていると、中から声がしたので、タクマは謁見の間へ入っていく。

「タクマ殿、よくぞ来てくれた。先日は愚かな貴族たちが失礼をした。深く詫びさせてもらう」

前回の謁見のときにはいなかった壮年の男性が謝罪してきた。

その男は髪を短く刈り上げた、角刈りのような髪型だった。年のわりには鍛えられている印象だ。

「……誰だ？」

タクマの不躰な言葉をコラルが諫めようとすると、壮年の男は手で制して自己紹介を始める。

「良いのだ。挨拶が遅れて申し訳ない。私は、パミル王国宰相のザイン・ロットンだ」

「宰相さんですか。俺はタクマ・サトウ、行商人兼冒険者です。そして、あなた方の言う転移者でもあります。あのときのことは気にしなくても大丈夫です」

宰相を前にしても傍若無人ぼうじやくじんなタクマの態度に、周りの貴族たちがザワつきだす。しかし、宰相は至って平気そうだった。

「わざわざありがとう。さつそくだが、前回渡した契約書を見せてもらってよろしいかな。条件に足したいことはあるかね？」

「とりあえずこれで問題ありません。しかし、こちらにメリットがありすぎるように思います。大丈夫なのでしょうかね？」

あとから変更してくれと言われないように、とタクマは確認したのだが、まったく問題はないぞうだ。

「我が国は転移者とは絶対に敵対しないと決めている。なので、条件に関しては問題ないのだ」

契約書を宰相に預けると、奥から王が仰々ぎょうぎょうしく登場してきた。

「タクマ殿、待たせたな。よくぞもう一度来てくれた。感謝するぞ」

「ええ、さつそく契約を進めましょう」

さつそく王は宰相と言葉を交わすと、タクマに話しかける。

「契約書の条件には問題がないそうだな。相違ないか？」

「はい」

宰相から契約書を受け取った王はさつそくサインする。その後タクマがサインすると、これで契約は成立したようだった。

王はその場にいる貴族に言い聞かせるように告げる。

「これで、我が国とタクマ・サトウ殿は相互に干渉かんじょうしないという、不可侵の契約を締結した。只今より我が国は、タクマ・サトウ殿とその関係者たちと絶対に敵対してはならない。万が一敵対した場合は、たとえタクマ殿が許したとしても、国として厳しい罰に処する。このことを肝きまに銘じるのだ。この場にはいない者たちも含め、すべての貴族に命令を發布する。分かったか？」

「[[[[はっ!!]]]]」

王の言葉にしっかりと返事をした貴族たちは、膝ひざをついて頭こぶしを垂れた。

続いて王は、タクマに向き直る。

「次に、タクマ殿の暗殺計画に関する賠償の話だ。最初は金銭での賠償を考えていたのだが、君は商売で金には困っていないそうだな。何か欲しい物はあるかね？」

「特に欲しい物はありませんが……」

ふと思いついて、タクマは告げる。

「そうですね、では土地をください。トーランから少し離れた場所なのですが」

タクマが指定したのは、以前ヴァイスたちや子供たちと一緒に遊んだ湖畔こはんである。その場所がいまいち分からなかった王は、宰相に地図を持ってこさせた。

「その土地が欲しいと?」

「ええ、ヴァイスたち……いえ、私の従魔たちの好きな場所なので。皆と相談してからはなりますが、そこに居を構えたいと思っています。彼らが自由にできるように、広い土地が欲しいのです」

「従魔たちは自然に居るのが一番安らげるといふわけか。宰相、タクマ殿が欲しているのは、どのような土地なのだ?」

王に問われた宰相は、すぐにその場所について説明する。

「あの辺りは住むには適しません。何しろ、Aランク冒険者でさえ入るのをためらう、かなり危険な場所です。そこを指定されるといふことは、タクマ殿なら対策ができるということなんです。うが……どちらにしても、人は近づきませんので問題はありませぬ。その土地を与えるならば、ギルドにも報告しておかねばなりません。手続きは私のほうでやります」

「そうか、ではその湖を囲んだ山までの土地を与えよう。書類等は後ほどコラルに預けておく」

「ありがとうございます」

即決である土地をもらえることになった。

タクマは、内心でガッツポーズをする。

(よし! 土地さえ手に入ってしまったらどうにかなるぞ。あとはみんなと話さないといけないだろうがな)

その後は、タクマが扱っているコショウや、旅の途中で引き取った孤児たちについて話し、二回目の謁見は終わった。

5 割り込みと二柱ふたはしら

王との二回目の謁見を済ませても、すべての用事が済んだわけではないため、タクマたちはまだ王都にいらなくてはならなかった。

しかし、閉じこもっているとみんな元気がなくなってしまう。そう心配したタクマは、再び書き置きをして、王都を脱出することにした。

そんなわけで彼らは今、森の中でゆったりとした時間を過ごしている。

手紙には「泊まるかも」と書いておいたし、緊急の場合は遠話で連絡が来るだろうから、今日はこのまま野営をすることにした。

食事の準備はタクマの仕事である。タクマは王都で買い込んでおいた食材でササツと作る。

ヴァイスたちは周りの警戒のため、森中を走っていた。と言っても、周辺にはタクマたちに危害を加える生き物はいないので、ほとんど遊んでいるだけである。

「みんな、元気だな。一日遊び通しても飽きないみたいだし」

「マスター。元々ヴァイスたちは自然とともにいる存在です。どんなに遊び回っても飽きることはありません」

「確かにそうか。まあ、ヴァイスたちが楽しいならそれで良いな」
食事の準備が終わったので、タクマはヴァイスたちを呼ぶ。

しかし、ヴァイスたちは離れたところに固まっていて、呼んでも戻ってこなかった。しばらく待っていると、ヴァイスたちは何者かを引き連れて戻ってきた。

「アウン！（父ちゃん、拾ったー！）」

ヴァイスが連れてきたのは、小さい毛玉のようなものと紐ひものようなものだった。

じっと観察してみて、タクマはようやく分かった。

「ん？ 兎うさぎと蛇へびか？」

兎と蛇は、どちらも相当衰弱していた。

タクマが回復魔法をかけてやると、いくらか体力は戻ったものの、まだ万全ではなさそうだ。

空腹なのかもしれない。

「とりあえず、何か食わせてみるか」

兎にはニンジンをお腹がすいていたようで、どちらもすごい勢いで食べる。

タクマは、兎の食事の様子は見たことがあったのだが、蛇のものは初めてだったのでビックリし

てしまった。話には聞いていたが、まさか本当に丸呑みにするとは思わなかったのだ。

兎と蛇が食べている間に、タクマたちも食事を始める。

ヴァイスたちは、久しぶりに食べるタクマの手料理ということもあって、嬉しそうに食べていた。タクマは、そんな様子を見ながら酒を飲む。

食事が終わったヴァイスたちは、タクマにクリアの魔法をかけてもらってから、体を小さくしてテントの中に入っていった。

兎と蛇は食事を終えると、電池の切れた玩具がんぐみたいにその場で動かなくなった。どうやら眠ってしまったらしい。

「うーん。気配がヴァイスたちと似ているんだよな。それはともかく、何でここにいるのかっていうのが問題だ」

タクマは、この兎と蛇から何となく感じるものがあった。ヴァイスたちと同じように神に連なる存在ではないかと考えたのだ。

だが、なぜこんなところにいるのかは分からない。

そんなふうを考え込んでいると、念話ねんわでヴァイスが呼びかけてきた。兎と蛇をテントに運んでくれるらしい。

テントから現れたヴァイスは、兎と蛇を優しく抱き上げると、再びテントに入っていった。それからみんなは、思い切り遊んだせいか、すぐに眠ってしまったようだ。

タクマも今日は早々に寝ることにした。



気づくと、いつもの真っ白い空間にやってきていた。ヴェルドの空間である。

「……ん。ここも久しぶりだな」

「ええ、お久しぶりですね、タクマさん。今日お呼びしたのは……」

ヴェルドがタクマにそう話しかけた瞬間――

タクマとヴェルドがいた空間が、ガラスの割れるような音とともに様変わりした。そこは、今までの白い空間ではなく、草原のような場所だった。

「な、なに?? 私の空間が……」

戸惑うヴェルド。

「申し訳ありません、異世界の神よ。強引に割り込ませていただきました」

そう声が出したのは、タクマとヴェルドの後ろからだ。振り返ると、そこには女性が二人立っていた。

(この方々はまさか……)

タクマには心当たりがあった。

「あら、タクマ殿は私たちが分かるのかしら?」

心を読まれたようなので、タクマは頷く。

「……おそらくですが」

「言ってみてください?」

「伊耶那美命様と、弁財天白龍王大権現様ではないでしょうか?」

「さすが、いろいろな神の祝福を受けているだけあるわ。しっかりと勉強しているようね」
「どうやら正解だったようだ。」

なぜ分かったのかというと、かつてタクマが神社仏閣巡りをしていた神様の中で、兎と蛇に関係していたのはその二柱だけだったためだ。

「そこでようやくヴェルドが冷静になつたらしく、タクマに尋ねてくる。」

「タ、タクマさん。その方々は……」

「私がいいた世界の神様です。なぜこちらの世界でお会いできているのかは分かりませんが……」

女神の二柱がタクマの代わりに答える。

「それは私から話しましょう。ヴェルド神の領域に割り込めたのは、日本でタクマ殿が参拝した神々が力を貸してくれたからです。それに加えて、私たちの神格がヴェルド神よりも高いということもあります。とはいえ、この空間を維持できるのはわずかな時間のみ。ヴェルド神よ、タクマ殿

と話をさせてくださいませんか？」

「はい……」

女神はさらにタクマに語りかける。

「あの兎と蛇も本当は、毘沙門天びしゃもんてんが送った虎の眷属けんぞくと一緒に届けるはずだったのです。ほぼ同じタイミングで送ったのですが、位置がずれてしまい、タクマ殿とお会いするのがこまですれ込んでしまったようです」

「そうだったんですか。ともかく、そこまで心配していただけたことは、本当にありがたいことです」

「タクマ殿のように熱心に祈ってくれる存在はとても貴重なのです。加護を与えた神たちも嬉しかったでしょう。もちろん、私たちも嬉しかったですよ」

そう言って二柱は優しい笑みを浮かべた。

「あの子たちも、他の子たちと同じように、あなたの家族として迎えてくれると嬉しいです。きっとあなたのためになってくれるでしょう。それとこの空間を出たあとは、タクマ殿には私たちの加護が付いていますので、役立ててくださいね。あなたは強大な力を持っています。これからも力の使い方に注意して自由に生きてください」

「ありがとうございます」

女神がヴェルドを見る。その表情は厳しさを孕はらんでいた。

「ヴェルド神。タクマ殿に頼み事をするのを駄目だとは言いませんが、多すぎるのではないのでしょうか？」

「はい……申し訳ありません」

続いて、もう一柱の女神が言う。

「タクマ殿を呼んでお話しするくらいは良いですが、あまり外界げがいに干渉するのはいただけません。今一度自分の役割を考えなさい」

なぜか二柱に説教を受けているヴェルドは、恐縮しきりだった。

二柱は一通り説教し終えると、優しい表情に戻ってタクマに告げる。

「そろそろ、この空間を維持するのも限界のようです。次にタクマ殿と会えるのはいつになるかわかりませんが、それまで元気に過ごしてくださいね」

すると再び、空間が碎けるような音が鳴り響いた。

気づくと、タクマとヴェルドはいつもの白い空間に戻っていた。

「びっくりしたな……まさか日本の神がこっちの世界に干渉してくるなんて」

タクマと同じように、ヴェルドも驚いている。

「タクマさん！ タクマさんの世界は何柱の神様がいるんですか!? しかも私よりも偉い神様まで！」

「何柱と言われましても……おそろく数えきれないくらいの神様がいるのではないのでしょうか？」

「神格は分かりませんが、俺がいた国では、いろんなものに神様が宿ると言われていましたし」
どう説明して良いか分からなかったので、タクマはザツクリとした知識を伝えた。

「そ、そうなんですか。私からタクマさんを呼び出したのに申し訳ないですが、今日のところはこれで終わりますしょう。また来ていただけますか？」

タクマが了承すると、ヴェルドは少し疲れたような表情をして、見送ってくれたのであった。

6 名付け

タクマは、お腹に重みを感じて目を覚ました。

目を向けると、兎と蛇がお腹の上でタクマを見つめている。

「もう目を覚ましたのか？」

「クウ」

「……」

兎は返事をしたが、蛇のほうは喋れそうにない。

(確か蛇は威嚇音いかおんくらいは出すが、鳴いたりしないんだっけ？)

タクマは兎と蛇を抱き直すと、そのままテントから出た。

二匹をテーブルの上に乗せてやる。

兎は全身が真っ白な毛並みに覆われているものの、額ひたいと前足、尻尾しっぽが真っ赤でとても愛らしかった。蛇のほうは白い体に一筋のラインが入っていて、これもまた可愛らしい。どちらの性格も温厚
そう、二匹は大人しくテーブルの上に乗っていた。

「とりあえず名前を決めないといけないな」

兎と蛇を見ながら考えていると、目を覚ましたヴァイスたちがモソモソと出てきた。

タクマは、二匹の名を付けるのは後回しにして食事にすることにした。

サツツと仕度したくをすると、みんな自然に触れてストレスがなくなったのか、いつも以上に食欲旺盛おちせきだった。

食事を終えて片付けを済ませ、タクマは改めて名前を考える。

「悩んでも仕方ない。兎はブラン、蛇はレウコンでどうだ？」

凝った名前を付けるのは得意ではなかったので、これまでと同じように色から付けた。ブランはフランス語で白を意味し、レウコンはギリシア語で同じく白を指す。

「クウ！」

「……」

二匹とも気に入ってくれたようで、嬉しそうにしている。

喜ぶ二匹を眺めていたら、ヴァイスが話しかけてくる。



「アウン！（父ちゃん、あの子たちに、父ちゃんと話せるように念話を教えてあげたいなー！）」
「ん？ 教えられるのか？」

「アン！（うん！）」

「そうか。じゃあみんな教えてやってくれるか？」

ヴァイスによると、二匹はヴァイスたちとはすでに意思疎通ができるらしいのだが、タクマとは念話ができないので教えてあげるとのことだった。

ブランとレウコンは、ヴァイスたちに連れられて森の中へ入っていった。

その後タクマは、食後のコーヒーを飲みながらまったりと過ごした。

そうしてのんびりしていると、ナビが話しかけてきた。どうやらコラルから遠話が来たらしい。

「タクマ殿か？ どうだそっちは？ ゆっくりできたか？」

「ええ、のんびりと過ごせました。何かありましたか？」

「いや、特に何かがあるというわけではないんだが、いつ戻ってくるのか聞きたくてな」

「そうですね、今日の夕方には戻るようになります。それと……」

タクマはついでに、新しい家族としてブランとレウコンが加わることを伝えた。

「なるほど。では、戻ったらギルドで従魔登録をしなければな」

「従魔登録？」

トラブルを避けるために、ヴァイスたちに従魔のふりをさせることはあったが、従魔登録という

のはしたことがなかった。そのことを伝えると、コラルは詳しく教えてくれた。

「君たちは常に一緒に行動しているから、ギルドのほうで勝手に登録してくれていたのかもな。実際、君のカードにはヴァイスたちが登録されているぞ？」

さらに聞いてみると、そもそも従魔登録というのはギルドで申請を行うものであるらしい。

タクマの場合、最初のメルトの町でヴァイスが登録され、メンバーが増えるたびに様々な町の商業ギルドで登録が行われていたようだ。ちなみにこの手続きをしないと、従魔は捕らえられてしまう可能性があるのだという。

その後タクマは、コラルとしばらく話した。

コラルとの遠話を切ってから気配察知をすると、ヴァイスたちはかなり遠くへ行っているようだった。

「さて、ヴァイスたちが戻ってくるまでゆっくり過ごすかな」

タクマはアイテムボックスからPCを取り出すと、久しぶりに動画を楽しむことにした。ナビも興味があるようなので、一緒に観る。

動画は、北海道の大自然の中、汽車で旅をするというものだった。

タクマは一時間ほど動画を観ているうちに、不思議な感覚になった。動画の中の景色はとても懐かしいのだが、帰りたいとは思わなかったのだ。

タクマはふと呟く。

「こっちの生活が幸せだからだろうな……」

「マスターは、あちらの世界に戻りたいとは思わないのですか？」

「戻りたくはないな。こっちにはナビがいて、ヴァイスたちがいる。それに引き取った子供たちもいるしな。楽しくてしょうがない」

いつの間にか日が高く昇っていて、昼になっていた。

食事の用意をしながらヴァイスたちを待っていると気配を感じた。彼らはすでに近くまで戻っているようだった。

「アン！（ただいまー！）」

「ミアー（ただいま、お父さん）」

「ピューイー（戻りました）」

「キキ（お腹空いたー）」

「キュ！（ご飯ー！）」

ブランとレウコンも声をかけてくる。

「クウ？（き、聞こえてるかな？ お父さん？）」

「……（改めてよろしくお願ひいたします。父上）」

「みんなおかえり。ご飯はできているから食べて良いぞ。ブランもレウコンも、これからはみんな

家族だからな。よろしくな」

無事に念話ができるようになっていたので、タクマは安心した。

それから、みんな一緒に食事を済ませた。

すべての道具を仕舞ったあと、タクマはブランとレウコンの能力を確認しようと思ったのだが、帰る時間が迫っていたため、コラルの屋敷に戻ってからにした。

タクマはみんなに声をかける。

「みんなゆつくりできたか？ もう少しで帰れるから、良い子にしていな」

ヴァイスたちは「はい！」と良い返事してくれた。

タクマはヴァイスたちを一通り撫でると、そろって王都へ向かうのだった。

7 能力確認と苦言

ギルドに寄ってしつかりと従魔登録を済ませたタクマたちは、コラルの屋敷へ向かった。ブランとレウコンはすでにヴァイスたちと打ち解けていて、仲良く歩いている。

部屋に入ったタクマは、ブランとレウコンをテーブルに乗せてやる。

「さて、ここなら安全だ。鑑定させてもらっていいかな？」

どちらも受け入れてくれたので、さっそく鑑定する。

〔名前〕	…ブラン
〔種族〕	…神獸（兔）
〔年齢〕	…1歳
〔MP〕	…50万
〔称号〕	…伊耶那美命の神使、タクマの守護獣
〔スキル〕	…病氣無効、毒無効、精神魔法無効、質量操作（極）、念話（極）、立体機動（極）、聴力（極）、跳躍（極）、気配察知（極）、索敵（極）、隠密（極）、魔力強化（極）、弱体化魔法（極）、強化魔法（極）、即死魔法（極）

（へえ。ブランはサポート能力に特化しているな。いやしかし即死魔法って……おそろくイザナミノミコト様が生死を司っているのが影響しているんだろうな。むやみに使わせないようにしな（うん）

続いてレウコンを鑑定する。

〔名前〕 …レウコン

〔種族〕 .. 神獸（蛇）

〔年齢〕 .. 1歳

〔MP〕 .. 50万

〔称号〕 .. 弁財べんざいてん太白はくたい龍りゅう王大おうだい権現こんげんの神使、タクマの守護獣

〔スキル〕 .. 病氣無効、毒無効、精神魔法無効、質量操作（極）、念話（極）、柔軟機動（極）、

温度察知（極）、臭気察知（極）、気配察知（極）、魔力察知（極）、索敵（極）、

隠密（極）、魔力強化（極）、回復魔法（極）、水魔法（極）、毒魔法（極）、

精神魔法（極）

（レウコンは蛇らしく、察知系の能力と毒が特徴か。水魔法と回復魔法を持っているのは、弁財天様の影響だろうか）

確認を終えたタクマは、ブランとレウコンに話しかける。

「よく生きててくれたな」

「クウ（お父さんに会えるの待ってたの）」

「……（父上に会えたのは奇跡）」

健気けんげなことを言ってくれるブランとレウコンをタクマが優しく撫でると、どちらも嬉しそうだった。

「そういえば、ブランとレウコンは、移動するときはどうするか」

タクマがそう尋ねると、ブランはタクマの後頭部に張り付き、レウコンはタクマの腕に巻き付いた。

（ここが良い！）

どうやってくっ付いているのか不明だが、タクマが頭や手を動かしても二匹は落ちることがなかった。

「まあ、構わないが、本当にそこで良いのか？」

（うんー）

どちらもそれで良いと言うので、タクマは好きにさせることにした。

それから、ブランとレウコンの能力をみんなに説明した。ヴァイスたちはブランたちが来たことで、さらに自分たちの能力が活きると思って、喜んでくれるようだ。

ヴァイスたちがブランとレウコンを囲んで歓迎しているのを見ながら、タクマはふと思った。

（あれ？ 二匹が加入したことで、俺たちのパーティは穴がなくなるんじゃないか？ 今までは攻撃特化だったけれど、ブランとレウコンによって補助や回復を受けたりできるし）

その後、タクマたちはすぐにベッドの上で眠ってしまった。

ブランとレウコンは、ようやく合流できたタクマたちの眠っている姿を見ながら、静かに話し始める。

「クウ……（本当に合流できて良かったね）」
「……（もう少し遅かったら危なかったかも）」
二匹は安心感でいっぱいだった。そして、二匹だけで生き抜いた生活を思い出すのだった。



一年以上前、タクマがゲールと合流した頃。
ブランとレウコンは、何も無い森の中で目を覚ました。

辺りには、自分たちよりも強い気配がある。近くに合流するべき存在——タクマがいないことに気がついた二匹は絶望した。

「ク、クウ!?（ど、ど、ど、どうしよう!? 近くにいないよ!?）」

「……（むう、これはまずいかも）」

とにかくここには危ないと考えた二匹は、近くにあった太い木に登った。

蛇であるレウコンは木登りが得意なので、そのままスルスルと登っていったが、兎のブランはそうはいかない。ブランは身体強化の魔法を自分にかけて木の枝まで一気に飛んだ。

こうして直近の危機を回避した二匹は、今の状況を整理した。

- ・ 自分たちの主になる人間が近くにいない。
- ・ 一つ合流できるか分からない。
- ・ 周囲には強そうな敵がたくさんいる。
- ・ 主と合流するには、とにかく生き抜かなければならない。

絶望的な状況だったが、二匹は諦めなかった。お互いの能力を確認し、生き抜く方法を話し合う。
「……（救いだっただのは単独じゃないこと。協力すれば生き抜けるはず）」

「クウ……（そうは言うけど、主となる人がいつ来るか分からないのは辛いよ）」
前向きに話すレウコンに対し、諦めていないもののブランはやはり不安そうだった。レウコンは、ブランを鼓舞するようにさらに続ける。

「……（何のためにここに来たのか忘れては駄目！ 主を守るために来たんだから、これくらいの試練は乗り越えないと……）」

「ク、クウ！（そ、そうだったね。僕らはご主人様を助けるために来たんだ。僕もがんばる!）」

ブランもようやく不安を心の奥に仕舞い、生き抜く決心をした。

こうしてレウコンとブランは、行動を開始したのだった。

立ち読みサンプル
はここまで

それから数時間後。

二匹の眼下には幼いヤギがいて、草を食べていた。群れから離れたのだろう。レウコンとブランは、生きるためにヤギを倒すつもりでいた。

「クウ……（僕が、即死魔法で仕留める。この魔法はこれまで使ったことがないけど）」

「……（あなたの魔法は時間がかかるから、精神魔法で動けなくする）」

相談を終えた二匹は、さっそく行動に移る。

まずはレウコンが、精神魔法をヤギに向けて放った。

魔法をかけられたヤギは体を震わせると、そのまま地面にうずくまる。

その際にブランは即死魔法を練り上げる。しばらくして魔法が完成すると、動けなくなっているヤギに放った。

ヤギは声をあげることなく、ビクリと体を震わせて、あっけなく死んでしまった。

思った以上に魔法の威力があったことに驚きながら、二匹は生き抜くチャンスを見いだしたのだった。



過去のことを遠い目で思い出していた二匹だったが、自分の仲間と主であるタクマの姿を見て改

めて嬉しくなった。

「クウ（生き抜くことができ、本当に良かったね）」

「……（……うん。父上も良い人だった。それにヴァイスたちも優しい）」

そう言って幸せを噛み締めていると、二匹は眠くなってきた。タクマの体に密着して、ようやく警戒をすべて解除して眠りに就くのだった。



翌朝。コラルの屋敷の庭では、タクマと、トーランから来た騎士たちが模擬戦を行っていた。勇ましい声が周囲に響いている。

「らあ！ これでどうだ！」

コラル付きの騎士が、タクマの首めがけて刃引きした剣を振り下ろす。

「甘いな」

タクマは半身になって剣を避ける。同時に懐に入り、空いた手で騎士の左腕の袖を掴むと、そのまま投げ飛ばした。

叩きつけられた騎士は、息を詰まらせ咳き込んでしまう。

「げぼっ……参りました」